

『三国史記』「地理志」の高句麗地名漢字： おもに日本語との比較による考証（続）

高木 雅弘

はじめに

1. 音位転換
 - a. 《熊閃》
 - b. 「管述」
 - c. 《牛頭》
 - d. 「首乙」
 - e. 「首泥」
 - f. 「加支」
2. 重訳型地名
 - a. 《釜山》
 - b. 「若只頭恥」
 - c. 「未乙省」

まとめ

はじめに

前回、『東洋文庫書報』第47号で掲載して頂いた今回と同じ題名の拙稿の前篇（以下「前稿」と略す）では、紙数の関係上とりあげられなかった部分を、今回「続」として掲載して頂くことになった。

今回は前稿の補遺として、高句麗語の音韻変化の重要な要素を構成する‘音位転換’（または倒置）について、前回では取り上げられなかった別の規則を述べさせていただいた。また、同一地名に複数の別名をもつ例を‘重訳型地名’として取り上げることとした。

なお、東洋文庫所蔵の『三国史記』の刊本は、今回も前稿と同じく、それぞれ①、②、③の刊本のように呼ぶこととしたい。（ ）内の数字

は東洋文庫の請求記号である。

- ① (VII-2-134) 『三國史記五十卷』〔高麗金富軾奉宣撰、朝鮮刊【太祖三(明洪武二十七年)年跋】鑄字印補寫〕
- ② (VII-2-804) 『三國史記五十卷』〔高麗金富軾奉宣撰、昭和六年、京城、古典刊行会景印〕
- ③ (VII-2-1018) 『三國史記五十卷附三國史記異體字類』〔高麗金富軾奉宣撰、日本坪井九馬三・日下寛校、大正二年刊、東京、文科大學史誌叢書之一〕

1. 音位転換

前稿では、日本語の $C_1iC_2a \sim C_1iC_2o$ (C は子音を、右下の数字は祖形の順番をあらわす) が高句麗語では C_2aC_1e のような形になっていることを指摘したが、他にも重要な音位転換の例が見られる。

a. 《熊閃》

『三國史記』の地理志、卷37には「功木達、一云熊閃山。」(功木達、あるいは「熊閃山」といふ) とある。「功木」 $ko\eta mok$ 全体を日本語の「クマ」《熊》と比較する意見が見られるが、単純に見れば、「功」 $ko\eta$ が《熊》で、「木」 mok が《閃(ひらめく)》を意味しているように見える。しかし、《熊》をあらわすことばは、朝鮮語では kom 、日本語では $kuma$ になるので、「功」 $ko\eta$ の末音の(軟口蓋)鼻音 η がどのようなプロセスで成立したのか、合理的に説明する必要がある。

まず、2番目のことばの頭音が m になっていることが注目される。「功木」 $ko\eta.mok$ は、隣接する軟口蓋閉鎖音 k と唇音 m が互いに入れ替わって影響しあっていると考えられる。

$ko\eta.mok < *kok.mok < *kom+kok (< *kuma+kuka)$

高句麗語「乃勿」 $*n\Lambda mil$ 《鉛》をギリヤーク(=ニヴフ)語の $nen'gal$ 《鉛》と比較する説があるが⁽¹⁾、これも同様な現象で変化したものであろう。なお、1965年に出版された『ロシア語・ニヴフ語辞典』(382頁)では《鉛》のつづりは $n'e\eta gal$ (元のつづりは $ne\eta gal$ 、2番目の n の

右下に。〔マル〕の符号)となっているので、それに従って音韻変化を推定すると下のようになる。鼻音 m の前に g (または k ~ x) のような軟口蓋音の存在を想定しなければ、ŋ に変化することはなかったのではないかと考えられる。

*na.g+mal > *n̄i.g.mal > *nim.gal > *niŋgal > n'eŋgal

注目すべきことは、n'eŋgal の語末の流音が r ではなく l であったことと、音節末母音の a を保持していることである。祖形 *na.g+mal の *mal は《鉄》をあらわす高句麗語「毛乙」*mal と共通の要素であろう。*na.g は《青》をあらわす要素であると考えられ、モンゴル語 noγuyan 《緑》の語根 noy.u+ に近い。

鉛、青金也。…(鉛とは、青金なり)(『説文解字』卷14・金部)

ただし、高句麗語には《金 (= 黄金)》をあらわす「蘇文」(so.m̄in = *so.m̄il の so+) とは別に《黄》をあらわす「骨」kol、《銀》をあらわす「折」cjəl とは別に《白》をあらわす「奈兮」*nahe という色彩名称が存在することから、《青》をあらわす要素 *na.(g) も金属名限定であろう。

ニヅフ語には、ほかに n'emqa 《千》という数詞の例もある。これは満州語の minggan (<モンゴル語 miŋγan) 《千》からの借用であろう。ここでも音位転換の跡が見られる。

miŋγan > *minqa(n) > *nimqa > n'emqa

話をはじめにもどすと、「功木」koŋ.mok < *kom.kok の *kom は *kuma (日本語「クマ」) のような形にさかのぼることは間違いない。「クマ」をトゥングース・満洲語系言語の kuma 《アザラシ》と比較する説は興味がある⁽²⁾。

「木」(ŋ).mok < *(m.)kok の母音 o は、単音節語であれば u か a にさかのぼり得る。*kok が *kak にさかのぼる場合、《閃 (ひらめく)》であれば、上代日本語の「カカヤク」《輝》に似ているが、母音の対応に難点がある。「カカヤク」の語幹 kakajak- のうち、kaka は重音省略で *ka になるとしても、うしろの *jak- と合体して *kajak- となった場合、*kajak > *kaak > *kak と変化して、母音 a が保存された可能性が高い(「高」は高句麗語、「日」は日本語の略。以下同じ)。

高、「沙」sa < *saja 《清》：日、「サヤ・カ」《清》

高、「加（阿）」ka(.a) < *kaθa < *θaka 《迓（＝辺）》：日、「サカ」
《坂》（「サカ・ヒ」《境》）

*kuk にさかのぼる場合、2音節の *kuka のような形を再構し得る。

「閃」には《ひらめく》以外に、《身をかかわす、避ける》という意味もあるが、この方が意味を理解しやすい。*kuka は日本語「カク・ル」（他動詞「カク・ス」）《隠》の語幹 kaku- と対応するかもしれない。

*kok < *kuka < *kaku-

これも音位転換の一種で、同じような変化 (C₁aC₂u > C₂uC₁a > C₂oC₁ ; C は子音、右下の数字は祖形の順番をあらわす) を遂げたものに「金」(訓読 *soj) 《休》がある。

soj < *suj- < *suja- < *jasu- (日本語「ヤス・ム」《休》)

もし、*suja- の方が‘原形’で、日本語の jasu- の方が‘変異形’だと主張する場合、なぜ kuma 《熊》は日本語で「マク」(?) に、*puka- 《深い》は「カフ>カウ」(?) のように変化していないのかを合理的に説明する必要があるだろう。

ちなみに、日本語の「カク・ル」《隠》、「カク・ム」《囲》を北方トゥングース系のエヴェンキ語 xakū± 《まわりをとりまく》《まわりをとりかこみたる、垣》と比較する意見があるが⁽³⁾、『トゥングース・満州諸語比較辞典』(311頁)では haku- となっており、これは満州語の fa kû (= faqu) 《横げた、魚梁》と対応し、*paku: のような形にさかのぼり得る。日本・高句麗語の祖形 *kaku- は、トゥングース・満州語の祖形 *paku: の語頭子音 p がうしろの子音 k の影響で k に同化したのであろう。

「達」tal 《山、高》は、日本語の「タケ」《岳》(takē < *takaj) と正確に対応し、形容詞形「タカ・シ」《高》とも関連づけられる。上代日本語のエ列乙類の ð は、高句麗語では流音 (r / l) になり、同じ母音に挟まれた k ~ g は消滅する傾向にあることは、これまでに指摘した通りである。なお、日本語の「タケ」《岳》については、南島祖語の *t'akaj 《登る》と比較する説があることを指摘したい⁽⁴⁾。高句麗語の「達」《山、高》(特に《高》)の古形にあたることばは、すでに西暦1~3世紀

の記録に見える。

北夷橐離國王侍婢有娠。王欲殺之。…（北夷橐離國王の侍婢、娠あり。王、これを殺さんと欲す。…）（『論衡』吉驗篇）

…昔北方有高離之國者。其王者侍婢有身。王欲殺之。…（…昔、北方に高離の國なる者あり。その王なる者の侍婢、身〔=娠〕あり。王、これを殺さんと欲す。…）（『三国志』卷30「魏書」烏丸・鮮卑・東夷伝、「夫餘」の条の注に引用された『魏略』の文）

これは、高句麗と同族の国である夫餘の建国者、東明の伝説に出てくる出身国の名前であるが、「橐離」が「高離」と対応していることは問題ない。しかし、「橐」tak と「高」kaw (< *kog) では発音がちがすぎる。おそらく、「高」は「橐」の‘あて訓’だったのではないだろうか。「～離」は日本語の送り仮名のような機能をもった文字で、ここでは「橐離」tak.lje が《高》という意味をあらわしたと考えられる。これは *takɺj のような形を再構でき、終末期の高句麗語（7世紀頃）の「達」tal と原始日本語 *takaj の中間形を示している。ちなみに当時（3世紀）の高句麗では、ほかにも漢字の‘訓読’がおこなわれていた形跡が見られる。

句驪王宮將歩騎二萬人、進軍沸流水上、大戰梁口〔梁音渴〕。…

（句驪王の宮、歩・騎二万人をひきい、軍を沸流水のほとりに進め、大いに梁口に戦ふ。…）（『三国志』卷28）

「沸流水」は高句麗領内にあった川で、「梁口」はその支流の河口であろう。〔 〕内は割り注になっている部分で、（中国の読者に対して）《梁》の音を「渴」と読むべきことが記されている。「渴」が k'at（カツ）のように読まれたのか、g'iet（ケツ）のように読まれたのかという問題があるが、もし後者であれば、日本語の「ケタ」（< *kia.ta）《桁》と対応するかもしれない。なお、後期高句麗語で《梁》をあらわす「～勿」（合成語で2番目以降の形）が日本語の「ハリ」と対応する可能性があることは、すでに前稿（21頁）で指摘した。

+mil < *mɺl < *Npal

b. 「管述」

《雲》をあらわすことばにも音位転換の痕跡が見られる。

[連城郡] …軼雲縣、本高句麗管述縣。(卷35、朔州)

日本語の「クモ」kumo は、朝鮮語 kurim 《雲》に似ているように見えるが、むしろ高句麗語の「管」kuanの方が母音の対応を説明しやすい。Kumo は、*kumu'a(n) のような音にさかのぼり得る。日本語と高句麗語からは、朝鮮語 kurim のような、語中の流音 (r / l) の存在は証明されない。

*kumu'an > *(mu)kuan > kwan

高句麗語では音位転換が起こり、さらに第1音節の部分が脱落したものであろう。ただし、母音の発音はやや古風な印象を受ける。

次に、「述」sjul 《軼》が《逸、佚(うしなう)》を意味していたとすれば、日本語の「ウシナ・フ」の語幹と対応し得る。これも日本語「ウシ」《牛》と高句麗語「首」sju 《牛》の音韻変化と平行した現象といえる。

sjul < *si'u.la- < *usi.la- / *usi.na-

c. 《牛頭》

《牛》を意味する「首」という文字も、日本語との比較において音位転換している可能性が高い。まず、「牛頭」、または「牛首」をあらわすことばは二種類みられる。

牛首州、首一作頭。一云首次若。一云烏根乃。(牛首州、「首」あるいは「頭」に作る。あるいは「首次若」といふ。あるいは「烏根乃」といふ)(卷37、地名表)

「首次若」と「烏根乃」は、いずれも《牛頭》あるいは《牛首》を意味していたと思われる。「首」sju 《牛》は、中期朝鮮語の sjo に似ているが、それよりも古い形を反映している。これは日本語の「ウシ」《牛》と対応し、これが祖語の形に近いと言えよう。

sju < *si'u < *usi

「～次」+c は省略が可能な接尾辞で、日本語の連体助詞、「～ツ」+tu と比較できる。「若」は《頭、首》をあらわす。

…次末若、比中郎將。一名郡頭…。(…次に末若、中郎將に比す。
あるいは「郡頭」と名づく…) (『翰苑』の注に引用された『高麗
記])

日本語の C₁uC₂a (C は子音、右下の数字は祖形の順番をあらわす)
は、高句麗語では C₁oC₂ の形であられることが多い。

高、「伏斯」pok.sʌ < *puka + sa (+sa は指小辞か)《深》: 日、「フ
カ・シ」《深》

高、「功木」koŋ.mok < *kuma + kuka-《熊・閃》: 日、「クマ」《熊》、
「カク・レ」《隠》

しかし、日本語 C₁uC₂a が高句麗語 C₁jaC₂ ~ C₁jəC₂ (または C₁ʌjC₂)
の形であられる場合もある。

高、「伯」pʌjk 《逢、遇》: 日、「ムカ・ヘ」 < *muka-apaj 《迎 (<
向・合)》

「伯」は、朝鮮語の漢字音では pʌjk / mʌjk という読み方になるが、
日本漢字音の呉音「ヒャク・ミャク」をもとにすれば、*pjak / *mjak
(漢音では「ハク・バク」) に準じた読み方になる。このような例は少な
くない。

「客」kʌjk (日本語呉音「キヤク」)、「生」sʌjŋ (呉音「シヨウ<シヤ
ウ」)

また、3世紀の高句麗語「桴京」《小倉》の「京」《倉》(呉音の旧仮
名づかいでは「キヤウ」)も参考になろう。

高、「京」kiʌŋ < *keá(l)ŋ < kuláŋ 《倉》: 日、「クラ」《倉》

なお、日本語の「クラ」《倉》を南島祖語の *guDaŋ と比較する説が
あることを指摘したい⁽⁵⁾。これらも、祖語の段階で第2音節の母音に
アクセントがあったために、第1音節の母音の弱化と‘音の割れ’が生
じたのではないか。したがって、「若」njak 《頭、首》も日本語の「ヌ
カ」nuka 《額》と比較することが可能である。

もうひとつの別名、「烏根乃」の「烏根」okin も《牛》をあらわすと
見られる。注目されるのは、母音間に挟まれた k が存在していること
である。これは、このことばが「首次若」よりも新しい時期になって採
用された可能性が高いことを示している。もし、古くから存在したこと

ばであったとすれば、母音に挟まれた k は、h の段階を経て消滅に向かっていたであろう。

この「烏根」は、表面的にはモンゴル語の *üker* 《牝牛》に似ているが、中世モンゴル語では *hüker* であり、原始モンゴル語では **püker* のような形を再構できる⁽⁶⁾。モンゴル語やテュルク語では語頭の p 音が消滅しているが、高句麗語では祖形の **pi(:)* が (h)i や (h)e に変化したと見られる以外、a や o のような、それより広い母音の前の p が消失したことは確認されない。したがって、*üker* 《牛》を「烏根」*okin* とそのまま比較できるのかどうか、疑問符が付くことになろう。

一方、モンゴル語の *ünijen* 《牝牛》の祖形は **ünigēn* が再構されているが⁽⁷⁾、さらに原初的な形を **üni.kän* と再構できるとすれば、女真語「委罕」*weihan* (満州語 *ihan*) 《牛》は、その陽母音 (あるいは後舌母音) の変異形 **uñi.kan* から変化した可能性がある。

weihan < **ujikan* < **uñi.kan*

「烏根」*okin* 《牛》も、本来の高句麗語かどうかは疑問があるものの、それと関連があるかもしれない。

okin < **u(ju)kʌn* < **ujikan* < **uñi.kan*

朝鮮語で《牛馬の小屋》をあらわす *ohʌj.jaŋ* ~ *ohij.jaŋ* の *ohʌj* ~ *ohij* (+*jaŋ*) は「養」(か)もこれに酷似している。

ohij.jaŋ < *ohʌj.jaŋ* < **okʌn(jaŋ)* < **u(ju)kan* (< **uñi.kan*)

「乃」*nʌj* 《首、頭》は **nʌ* の音をあらわしたと考えられ、これも朝鮮語の *nʌs* ~ *nʌcʰ* 《顔》に似ている。

d. 「首乙」

《原谷》の別名、「首乙吞」の「首乙」**sjul* も注目される。「原」*kjəŋ* は《穀倉》をあらわす文字「廩 (リン)」の略体字であるとする説がある⁽⁸⁾。「京」という字にも《倉》という意味があるが、《都 (みやこ)》という意味と区別するために《建物》をあらわす「广 (ゲン)」(いわゆる「まだれ」)という要素を加えたのかもしれない。ただ、3世紀の記録(『三国志』『魏書』東夷伝、高句麗の条)に見える高句麗語「桴京」《小倉》の「京」から作られた「造字」の一種という可能性もある。

高句麗語では、狭い母音 i の前の p が消滅したことは確認できるが (*kuku.pi > ko'e 「古衣」《鶻》)、それより広い母音 a や u の前の p が消滅したことは確認できない。したがって、sjul が *sipul のような音にさかのぼる可能性は小さい。sjul は *sihul < *si.kul のような形にさかのぼり得る。kul は *kula の語末母音が弱化した形で、日本語の「クラ」《倉》と比較できる。「首乙」自体は、古代の人名「クラジ」(< *kula.N+si) 《倉下》に酷似している。

3世紀の高句麗語「桴京」*pu.kiʌŋ 《小倉》は、「首乙」とは音韻的にかかなりの違いがあるように見えるが、日本語の「ホ・クラ」《神庫、祠(ほこら)》に似ている。

「桴」 pu = *pu(ə) < *pö?

「京」 kiʌŋ < *keá(ɬ)ŋ < *kuláŋ

「首乙」を構成する要素の一部と「(桴)京」は、同じ起源のことばから生まれた‘双生語’(doublet)の可能性が高い。同様の例は他にもある。

「丁」 tʃəŋ (< *taŋá) 《岐》: 「冬斯」 toŋ.sʌ (= *tʌŋ.s < *taŋ) 《岐》

「折」 cʃəl (< *calá) 《銀》: 「召尸」 col (= *cʌl < *cal) 《木銀 (= 水銀?)》

「耶」 ja- (< *eah- < *aθá-) 《浅》: 「牙」 a- (< *aha- < *aθa-) 《浅》

これらもアクセントの位置の違いによって生じたものであろう。

e. 「首泥」

《峯》をあらわす「首泥」 sju.ni は、日本語の「ウネ」《畝》、「ウナジ」《項 (= 首のうしろ)》と比較できる。別名「述尔」 sjul.ni は、やや古い発音であるように思われる。

「首泥」 *sju(n)ni < 「述尔」 *sjulni < *si.unʌl < *si+unʌlj
< *wunajN+si

本来、語末に置かれるべき流音が前の音節に移動している例は、他にも見られる。《口》をあらわす「忽次」、《休》をあらわす「冬音」の変化も参考になろう。

高、「~忽次」 +holc < *kolc < *kultu < *kutul < *kutuj 《口》:

日、「クチ」(合成語「クツ〜」)《口》

高、「冬音」 $türim < *tümil < *tuəmAlj < *tö.maj$ 《休》:日、「トム」
(未然・連用形「トメ」 $< tö.më$)《止、留》

この「首泥、述尔」を中期朝鮮語形 $sunilk$ 《嶺》と比較するのは妥当であろう⁽⁹⁾。これは、 $*sjunil$ の形に接尾辞 $+k$ が付加されたものが出発形であると考えられる。ここでも高句麗語の方が激しい音韻変化を経ていることがわかる。なお、日本語の「ウネ」を南島語 $lañit$ 《天》に接頭辞 $məN+$ が付加された形で、「ムネ」(合成語「ムナ〜」)《胸、棟》と関連づける意見があることを指摘したい⁽¹⁰⁾。高句麗語で《嶺》をあらわすことばには、ほかに「知衣」もある。

牛岑郡、一云牛嶺、一云首知衣。(牛岑郡、あるいは「牛嶺」といひ、あるいは「首知衣」といふ) (卷37)

「知」は、(李氏)朝鮮時代初期までは ci ($tʃi / tɕi$) ではなく ti の発音であり、 $ti \sim t̃i$ (語尾では $.t$) のように読まれたと考えられる。「衣」 ij は $*e$ に近い音で $*i$ にさかのほり得る。第1音節の「知」は、「首」《牛》のうしろに接尾辞のように付加されたことから、 $*ta$ の音が弱化し、その結果 $*ĩ$ のような音になったのであろう。《(東)墟》をあらわす「加知斤」($ka.ti.kin = *katik < *katak$) が日本語の「カタ」《形 (= 跡形)》と対応し得る例も参考になろう。

$+t̃i'e < *+tʰi < *ta'i < *ita$

これは、上代日本語の「イタ・シ」《痛》、「イタ・ル」《至》の語幹、「イタダキ」《頂》の「イタ〜」《極限に達する(もの)》とも関係があるかもしれない。

f. 「加支」

《菁 (= 草木が生い茂る)》を意味することばは複数見られる。

[朔庭郡] …菁山縣、本高句麗加支縣。(菁山県は、もと高句麗の加支県なり) (卷37、朔州)

菁達縣、一云昔達。(菁達県、あるいは昔達といふ) (卷37、地名表)

この「加支」 $ka.ci$ 《菁》も音位転換によって成立していると考えられる。《豊》をあらわす「且」 $c^h a (= *ca-)$ と関連があるのではないか。

波且縣、一云波豊。(波且県、あるいは波豊といふ)(卷37、地名表) 従来、この「且」を「旦」tan のあやまりとし、「波旦」patan を上代日本語「ワタ」《海》と関連づける説があるが⁽¹¹⁾、この地が「海曲(または海西)」と改られたのは統一新羅時代になってからで、卷37の「地名表」ではこれが《海》であることを示す別名は確認されない。また、高句麗語では2音節の単語の音節末母音の a は弱化して、i に変化(さらに消滅)したはずであるから、「波旦」patan がひとつのことばであった場合、「旦」tan の音がそのまま温存されたとは考えにくい。

「且」^{*}ca-《豊》は、日本語の「サカ・ユ」《榮》、「サカ・ル」《盛》と対応し得る。前稿では《菁》を意味する「昔」をそのまま sjök と読んだが、「昔」は「借」^cjak か「籍」^cjök の略体字と考えた方が頭子音^{*}c (= tʃ / tɕ) については整合性が保たれるので、この点は修正したい。これも、祖形のアクセントの位置の違いによる‘双生語’として説明できる。

「借」^{*}cjak- ~ ^{*}cjök- < ^{*}ceák- < ^{*}caká- / 「且」^{*}ca- < ^{*}ca(h)a-
 < ^{*}caka-

一方、「加支」は音位転換して音節末母音が弱化した形であると考えられる。

^{*}caka > ^{*}kaca > ^{*}kaci 「加支」

これと同様の変化は、「加」ka 《迕 (= 辺)》と「阿」a-《臨》の関係でも見られる。

高、「加」ka < ^{*}kaha < ^{*}kaθa < ^{*}θaka 《迕 (= 辺)》: 日、「サカ」
 《坂》、「サカ・ヒ」《境》

高、「阿」a- < ^{*}(h)a'a- < ^{*}haha- < ^{*}θaka-《臨》: 日、「サカ・フ」
 《逆》

こうした音位転換といった現象は、単音節化と形態素の‘退化’が進んだ高句麗語では、動詞や名詞など、意味の違いを弁別する機能をもたせるのに役立ったと考えられる。

2. 重訳型地名

巻37の「地名表」には、ひとつの地名に対して、ふたつ以上の別名が残されているものがある。その中には、複数の名称が併記されているものもあるが、分析が不明確で、あたかもひとつの名称であるかのようになっているものも見られる。

a. 《釜山》

巻37には「釜山縣、一云松村活達。」(釜山縣、あるいは「松村活達」といふ)という地名がある。単純に考えれば、「達」talが《山》を意味するから、「松村活」が《釜》を意味するのではないかと思うかもしれない。しかし、これは誤分析で、なおかつ重訳型の地名と見られる。

《松》をあらわす高句麗語は「夫斯」pu.sで、「～斯」+sは指小辞であろう。ここでは「釜山」を音読して《松村》と訳した可能性が高く、pu.s+anと区切ることができよう。pu.sは中期朝鮮語のpos《樺》と比較されている⁽¹²⁾。pus > posのような母音の変化(u > o)は、《牛》をあらわす高句麗語「首」sjuと中期朝鮮語sjoとの間でも見られるが、高句麗語のuは*(e)ü ~ *iCu(Cは子音、特にk ~ g ~ θ ~ j)にさかのぼり得る。語頭子音だけなら日本語の「ヒ」(< *pi)《檜(ひのき)》に似ているが、母音が対応していない。また、日本語のイ列甲類の「ヒ」(< fi < *pi)は、高句麗語では祖形のpが消滅して、iかeのような音としてあらわれる。

高、「古衣」ko'e《鵠》：日、「ククヒ」kukufi (< *kuku.pi)《鵠》

そこで注目されるのは、同じ巻37「地名表」にある《松》の異形、「仇史」*ku.sであろう。

夫斯波衣縣、一云仇史峴。(夫斯波衣縣、あるいは「仇史峴」といふ)

「史」saは、「斯」saと同じく指小辞+sをあらわしたものと見られる。「仇」kuは、*k(e)ü ~ *kiCuにさかのぼり得る。「夫斯」pu.s《松》の「夫」puは「仇」kuから変化したものであろう。なぜこのように変

化したかという、《童子》をあらわす「仇斯」ku.sʌ = *ku.s とほとんど同じ発音になることから、混同を避けるために‘異化’ (= dissimilation) の現象がおこったのではないか。

これと関連して、巻37の「李勣の上奏文」に挙げられた「國內州」の注記に「一云不耐」（あるいは不耐といふ）というのがあるが、「不耐」は日本海沿岸にあった地名（前漢楽浪郡の「不而縣」）であり、鴨緑江中流域にあった高句麗の旧都、国内城とは無関係である。ただし、7世紀当時、「國內」kuk.nʌj (> kuŋnæ) という発音が「不耐」pu.nʌj (> pullæ ~ punnæ) に近い音として認識されつつあった可能性は否定できない。

ところで、日本語の「キ」《木》は南島祖語の *kahui 《木》と関連づけられるが、南島祖語には別の形 *kahiu も存在する⁽¹³⁾。その陰母音変異形が高句麗語の「仇（史）」に発展した可能性がある。

*kahiu > *kaju > *kä(j)ü > *kəu(+sa) > ku.s 「仇史」 > pu.s 「夫斯」

なお、《松》をあらわす別の形「扶蘇」pu.so（「松岳郡、本高句麗扶蘇岬」巻35、漢州）は、「夫斯」pu.s に《子供、小さい（もの）》をあらわす要素の別の形 +o (< *+hwo < *ku'a) が付加された形であろう。+o は《駒（<馬・子）》をあらわす「滅鳥」mjər.o の「～鳥」+o にも見られ、日本語の「コ」《子、小》とも対応し得る。

「釜山」pusan = pu.s + an の *+an が《村》を意味したとすれば、日本語の「エ」je 《枝（=本城に対する支城？）》と対応する可能性がある。

+an < *jan < *ijan

「活達」は《釜山》を翻訳した形であろう。「活」hwal (< *huwaj / *θuwaj) 《釜》は、日本語では「ウエ」か、「スエ」に対応する可能性があるが、「スエ」であれば「スウ」《据える》の未然・連用形か、「スエ」《陶（=土器）》と関係があるかもしれない。

b. 「若只頭恥」

巻37に「若只頭恥縣、一云朔頭、一云衣頭。」（若只頭恥縣、あるいは

「朔頭」といひ、あるいは「衣頭」といふ）というのがあるが、これも重訳型の地名であると考えられる。この地名は「若只」と「頭恥」に分けた方が合理的に解釈できる。高句麗語では「若」njak が《頭、首》を意味することはすでに述べた。

「只」は ki と読まれるが、「若只」の後の「頭恥」は njak.ki の‘翻訳形’ではないかという疑いが残る。「恥」が《恥じ(る)》では意味的に通じないが、「聰」《さとい》の略体字であれば、ki は上代日本語「カガ」《利》と対応するかもしれない。「カガ」には《利益》と《利巧》のふたつの意味があるが、ここでは「心(こころ)利(かが)なる人」のように、《利巧》の意味で使われていると考えられる。

${}^*ka(\eta ga) > {}^*+k\lambda > {}^*+ki > +ki$

日本語「ナガ・シ」《長》の語幹と対応する高句麗語「内」《長》、「奈」《大》(nɔj = ${}^*n\lambda$) は、 ${}^*na\eta ga$ (または ${}^*la\eta ga$) のような形が収縮した *na が出発形であったと考えられるが、 ${}^*ka\eta ga$ も収縮して *ka のような形になったのであろう。それはさらに母音 a が弱化して ${}^*k\lambda$ のような音になり、合成語で2番目以降に位置したため、さらに ${}^*+ki$ のような音になったのではないか。それを「只」ki という文字で表記したのであろう。「毛乙」(mo:il = ${}^*m\lambda l < {}^*mal$) 《鉄 (<金属?)》に対する「乃勿」《鉛》の「~勿」+mil (日本語「ナマリ」《鉛》の「~マリ」と対応) のような変化が参考になるかもしれない。

次に、「朔頭」の「朔」は《ついたち (=月のはじめの日)》という意味であるが、高句麗語「若只」は《頭の日》という意味でも使われたのであろう。このことばを分析する上で、統一新羅時代の改名形「如熊(県)」が重要な意味をもつ。

[松岳郡] …如熊縣、本高句麗若豆恥縣。(如熊縣は、もと高句麗の若豆恥県なり) (巻35、漢州)

「若豆恥」は「若只豆恥」の省略形で、「如」は「若」と同じ意味のことば(《~のごとし》)で言い換えたように見える。「豆」は「頭」の略体字であろう。そして、「熊」(音 pi) の存在により、「只」が本来 pi のような音として認識されることがあったことをうかがわせる。上代日本語のイ列甲類の「ヒ」(fi < *pi) は、高句麗語の i ~ e と対応する傾

向が見られる。

高、「(沙) 熱伊」(sa.)njəli 《(清) 風》：日、「ナラ・ヒ」< *nara.pi:
《寒風》

高、「古衣」ko'e 《鵠》：日、「ククヒ」kuku.pi 《鵠》

「～只」+ki が日本語の「ヒ」fi 《日》と関係があるとすれば、*pi: > *hi の段階で njak の語末の子音 k の影響で同化して ki に変化した可能性がある。朝鮮語には《日》をあらわすことばとして、nal と hʌj があるが、hʌj が日本語の「ヒ」《日》に似ている。

*pi: > *fi > *hi > *he > hʌj ?

ただ、語頭の子音が *p > h に変化している点から見れば、比較的新しい時代に高句麗語か、それに近い系統の言語から借用されたのではないかという疑いが残る。

最後の「衣頭」についても、「若只」という音の別の解釈を示したものと考えられる。《衣》が動詞であったとすれば、「只」ki は日本語の「キ・ル」《着》の語幹「キ～」(ki- < *ki-) と比較できる。これは、高句麗語の音韻変化では *ki: > *hi > *i になるはずであるが、*hi の段階で njak の語末の子音 k の影響をうけ、同化して ki になったのであろう。なお、テュルク系の言語にも kij- ~ gij- (= kiy- ~ giy-) 《着る、身につける》という形があるが、これは古代テュルク語 käd- 《着る、身につける》がのちに kej- ~ gejj- のように変化していき、結果的に日本語に似た形になったものである。

c. 「未乙省」

巻37の地名表では、《國原城》の別名として「未乙省」と「託長城」が知られている。『翰苑』に引用された『高麗記』に記された官名、《郡頭》を「末若」と称している点から判断すれば、《国》をあらわす「未」は、「末」の誤記の可能性はある。

「未<末」mal は、*maCaj か *maRa ~ *maCaR(a) (C は子音、R は流音をあらわす) のような祖形にさかのぼり得る。音韻的には、上代日本語の「マク」《任 (= 任命する)》の未然・連用形「マケ」(makë < *makaj) に似ているが、意味的にはやや隔たりがある。中世モンゴ

ル語 balaqasun (< *balaka-sun) 《町》、古代テュルク語の baliq (< *balaka) 《町》の存在は興味ぶかい⁽¹⁴⁾。

《原 (=源)》をあらわす「乙」は、《泉》をあらわす「於乙」のさらに変化した形で、『日本書紀』(巻第24、皇極天皇元年二月丁未)に見える高句麗の権臣の名「伊犁柯須彌」《泉蓋蘇文》の「伊犁」と対応する。日本語の発音では i:ri となるが、7世紀頃の実際の発音は「乙」i:l に近い音であったと考えられる。i は「イ」の構えで「ウ」を発音した時に出る音である。日本語では閉音節(子音で終わる音節)の存在を許容しないので、音節末子音のうしろに i のような支え母音を付加したのであろう。「(於)乙」は日本語の「井」《井》と対応し得る。

「乙」i:l < 「於乙」*æ:l < *uəlj < *wōj < *wauj < *(w)uaj

ちなみに、日本語の「井」《井》を南島祖語の *vajəy 《水》と比較する意見があることを指摘したい⁽¹⁵⁾。ただし、*waj のような音であれば、日本語ではワ行の「エ」we のような音になっていたであろう。*(w)uaj のような音を推定すれば、音韻変化を合理的に説明できる。すなわち、中の母音 a と u が転換して au になり、さらに ö になったのであろう。

* (w)uaj > *wauj > *wōj > *wī > wi

《城》をあらわす「省」は「~忽」+hol とは別の形になるが、sjəŋ のように発音されたのであれば、朝鮮漢字音の「城」と同じになる。ちなみに、『北扶餘城州』の別名「助利非西」の「西」sjə は、その収縮形と見られる。

《託長城》は、「末乙省」のもうひとつの翻訳形であったと考えられる。(李氏)朝鮮時代を中心とする後代史料にしたがって、「託」を「葷」の誤りとする説もある⁽¹⁶⁾。しかし、『三国史記』では「託」が「葷」となっている部分はあるが、「葷」となっているものは確認できない。

[文武王、十三年] …九月、築國原城 [古葷長城] …。(九月、国原城を築く [いにしへの葷長城なり] …) (巻第7、『新羅本紀』第7)

[古葷長城] の部分は割り注になっている部分であるが、もし、「葷」《ススキ》が正しいとした場合、「長葷」ならともかく、「葷長」では語順が不自然で意味が通じにくい。むしろ「託」が「葷>葷」のように、

時代とともに‘修正’されたのではないかと考えられる。

「託」が動詞の場合、「長」は《長（おさ）》のような名詞的な意味になろう。それを「未乙省」に当てはめれば、「未」が《長》に当たる。近代の活字で印刷された③の刊本では、明らかに「未」と‘校正’されているが、①の刊本では、何の先入観もなしに読んだ場合、「未」か「末」か不明確な印象になる。注目すべきは②の刊本で、下の「乙」は「し」のような欠画になっているが、「未」にあたる字の左上にかたまりのようなものがあり、「朱」のように見える（後図参照）。

高句麗語では、《長》をあらわすことばには複数の種類がある。

長堤郡、本高句麗主夫吐郡。（長堤郡は、もと高句麗の主夫吐郡なり）（巻35、漢州）

長浅城縣、一云耶耶、一云夜牙。（長浅城県、あるいは耶耶といひ、あるいは夜牙といふ）（巻37、地名表）

内米忽、一云池城、一云長池。（内米忽、あるいは池城といひ、あるいは長池といふ）（巻37、地名表）

2番目の「耶」「夜」ja《長》は、「也（次）」ja(c)《母（の）》をあらわすことば（日本語「エ」je < *ija《兄＝年長者》）と関係づけられるかもしれない。

3番目の「内」naŋ (= *nʌ)《長》は、文字通り《長い》という意味で、《大》をあらわす「奈」と同じく、日本語の「ナガ・シ」《長》の語幹「ナガ〜」と関係があろう。ただし、高句麗語では単音節に収縮された形 *na- が出発形になる。

問題は1番目の「主夫」《長》で、「主」は「朱」cjuと同じ発音になる。《託長（城）》という別名が発生した背景には、「未」を「朱」と認識したことが考えられる。高句麗語の音韻変化の原則にしたがえば、cjuは *ci'u か *ti'u にさかのぼり得る。もし、*ci'u (< *uci) にさかのぼるとすれば、上代日本語の「ウシ」《大人》と関連づけられる（「ヌシ」《主》は「〜ノ・ウシ」の連声か）。

その動詞形「ウシ・ハク」は、《土地を領有・支配する》という意味になるが、高句麗語「主夫」の「〜夫」+pu も日本語の「ハク」《佩、着》の語幹 *pak- と関連づけられるかもしれない。ただし、語幹末の k

は消失しており、収縮された形になっている。また、直前の音節の母音 (c)u の影響をうけて母音調和したと見られる (本来なら、* +pi か * +p)。

「主夫」 cju.pu- < *ci'u + pʌ- < *uci + pa(k)-

後の「吐」《堤》は、日本語の「ツツミ」《堤》ではなく、「タ」《田 (＜貯水施設)》と対応する。もし、「ツツ・ミ」*tutu.mi のような出発形であったとすれば、tu は高句麗語で *co のような音に変化していたはずである。

次に、「乙」il が《託》にあたるとすれば、日本語の「ヨ・ル」《依、寄》と対応し得る。「ヨ・ル」(他動詞「ヨ・ス」)の語幹は jö- で、ここでも日本語の未然形に相当する活用語尾 (-ra) の痕跡が見られる。

il < *ər(i) < *juərʌ < *jö-ra

統一新羅時代に《子春》と改名された「乙阿且」の「乙」il は、《子》を意味しているように見えるが、《子》であれば「仇斯」《童子》ということばがあるので、別のことばの略体字かもしれない。《子春》ということばは理解しにくい、「子」の要素を含む《好春》や《孟春》なら意味が通じる。もし、「乙」が《好》を意味しているのであれば、日本語「ヨ・ル」《寄》の形容詞形、「ヨロ・シ (＜ヨラ・シ)》《宜》と対応し得る。

「阿且」《春》の「阿」a は日本語の「(イ)ヤ」《彌 (=ますます、いよいよ)》と、「且」cʰa は同じく「サカ・ユ」《榮》、「サカ・ル」《盛》の語幹と関係があるかもしれない。「サク」《咲 (=開花する)》はその収縮形であろう。

*ja.caka > *a.ca(h)a > aca

最後の「～省」+sjəŋ は、「～忽」+hol とは別の《城》をあらわすことばである。

まとめ

philology ということばには、「文献学」と「言語学」という意味が与えられているが、本来、刊本や写本の文字の異同を調べる場合、言語学

的な要素を応用することが不可分であったことを示している。

高句麗語と日本語は、中国の史料では3世紀以来の記録があるが、その時点で見ても、当時の高句麗語がはるか後代の日本語以上に激しい音韻変化を経験している部分があることがわかる。このことは、このふたつの系統の言語が‘分離’した年代が相当古いことを示している。それと同時に、文献記録が残された歴史時代以降に、高句麗語が日本語（の根幹部分）の形成に影響を与えたことはありえないことを示している。

音韻変化の特徴をまとめると、重音省略や母音の弱化にともなう収縮・単音節化と、語末半母音 j の流音化が見られる。また、‘音位転換’の現象がこれまで見落とされて来たことも指摘したい。さらに、アクセントの位置の違いによると見られる音の割れも観察される。ほかにも細かい現象はあるが、いずれも個々の単語でバラバラに起こったものではなく、法則性をもって変化していると言える。祖形を再構するのも、そうした変化が規則性・整合性をもって行われたかどうかを検証する上で、必要な作業であると考えからである。

文法面では、高句麗語は日本語と比べて形態素が貧弱な印象を受ける。特に、上代日本語では豊富な接頭辞の体系が高句麗語では欠如している点が挙げられる。その中には、指小辞のように日本語では接頭辞「サ～」であったものが高句麗語では接尾辞「～ス」(+s)として現れているものもある。また、動詞の活用語尾が消滅しているか、化石的にしか残っていない点も印象的である。これらも高句麗語内部で後天的に発生した変化であると考えた方が合理的に説明できる。

前稿と合わせて、今回とりあげた『三国史記』『地理志』の資料は、古地名研究にとって非常に重要な存在価値をもっているが、基本的には行政地名が中心であり、当該地域の住民の使用言語とは一致しないものも含まれる。今後は、できるだけ自然地名（特に水名）を中心とした分析によって、高句麗語やそれと同系の言語の分布地域を推定する必要がある。

注

- (1) 金芳漢『韓国語の系統』、ソウル、民音社、1986年3版、p.133.

- (2) 李基文「韓国語形成史」〔『韓国文化史大系』5・上「言語・文学史」I、ソウル、高麗大学校民族文化研究所、1971年再版〕、p.82.
- (3) 村山七郎『日本語系統の探求』、大修館書店、昭和53年（1978）、p.281.
- (4) 泉井久之助「日本語と南島諸語」〔『民族学研究』17（2）、日本民族学会、1953年3月〕、p.120.
- (5) 崎山理「日本語の系統とオーストロネシア語起源の地名」〔埴原和郎編『日本人と日本文化の形成』（第5章）、朝倉書店、1993年5月〕、p.78.
- (6) Poppe, N. 『アルタイ諸語比較文法—比較音韻論』〔Vergleichende Grammatik der altaischen Sprachen: Vergleichende Lautlehre. Wiesbaden, O. Harrassowitz, 1960〕、p.56, 109.
- (7) Poppe, N. 『アルタイ諸語比較文法』、p.62.
- (8) 前間恭作「三韓古地名補正」〔『史学雑誌』36（7）、大正14年（1925）7月〕、p.512.
- (9) 李基文「韓国語形成史」、p.80.
- (10) 村山七郎、国分直一『原始日本語と民族文化』、三一書房、1979年2月、p.165.
- (11) 村山七郎「高句麗語資料および若干の日本語・高句麗語音韻対応」〔『言語研究』42、日本言語学会、昭和37年（1962）10月〕、p.71.
- (12) 李基文「韓国語形成史」、p.81.
- (13) 村山七郎『日本語の語源』、p.210.
- (14) Poppe, N. 『アルタイ諸語比較文法』、p.122.
- (15) 村山七郎『日本語の研究方法』、弘文堂、昭和49年（1974）、p.92, 110.
- (16) 前間恭作「三韓古地名補正」、p.510.

参考資料（補）

前稿（『東洋文庫書報』47、2015）で紹介した資料は割愛させていただいた。

Karlgren, Bernhard. *Grammata Serica. Script and phonetics in Chinese and Sino-Japanese.* Stockholm, 1940.

E・V・セヴォルチャン『テュルク諸語語源辞典：見出し語 V, G および D の共通テュルク諸語と中期テュルク諸語の語幹』〔Э. В. Севортян, Этимологический словарь тюркских языков: Общетюркские и межтюркские основы на

- буквы 'В', 'Г' и 'Д'. Москва, 《Наука》, 1980].
- V・N・サヴェリエヴァ, Ch・M・タクサミ 『ロシア語・ニヴフ語辞典 (17300語)』 [В. Н. Савельева и Ч. М. Таксами, Русско-нивхский словарь. 17300 слов. Москва, 《Советская Энциклопедия》, 1965].
- 金芳漢(村山七郎監修、大林直樹訳) 『韓国語の系統』、三一書房、1985年11月。
- 李基文(村山七郎監修、藤本幸夫訳) 『韓国語の歴史』、大修館書店、1975年。
- (明治大学大学院文学研究科・博士前期課程修了)

國原城
 一云未乙省
 一云託長城

刊本①

國原城
 一云未乙省
 一云託長城

刊本②

國原城
 一云未乙省
 一云託長城

刊本③